

時代閉塞の現状

(強権、純粹自然主義の最後および明日の考察)

石川啄木

青空文庫

数日前本欄（東京朝日新聞の文芸欄）に出た「自己主張の思想としての自然主義」と題する魚住氏の論文は、今日における我々日本の青年の思索的生活の半面——閑却かんきやくされている半面を比較的明瞭めいりように指摘した点において、注意に値あたするものであつた。けだし我々がいちがいに自然主義という名の下に呼んできたところの思潮には、最初からしていくたの矛盾むじゆんが雑然として混在していたにかかわらず、今日までまだ何らの嚴密なる檢覈けんかくがそれに対して加えられずにいるのである。彼らの両方——いわゆる自

然主義者もまたいわゆる非自然主義者も、早くからこの矛盾をある程度までは感知していたにかかわらず、ともにその「自然主義」という名を最初からあまりにオオソライズして考えていたために、この矛盾を根柢まで深く解剖し、かいぼう 検覈するけんかくことを、そうしてそれが彼らの確執かくしつを最も早く解決するものなることを忘れていたのである。かくてこの「主義」はすでに五年の間間断かんだんなき論争を続けられてきたにかかわらず、今日なおその最も一般的なる定義をさえ与えられずにいるのみならず、事実においてすでに純粹自然主義がその理論上の最後を告げているにかかわらず、同じ名の下に繰返さるるまったくべつな主張と、それに対する無用の反駁はんぱくとが、その熱心を失った状態をもつていつまでも継続され

ている。そうしてすべてこれらの混乱の渦中かちゆうにあつて、今や我々の多くはその心内において自己分裂のいたましき悲劇に際会しているのである。思想の中心を失っているのである。

自己主張的傾向が、数年前我々がその新しき思索的生活を始めた当初からして、一方それと矛盾する科学的、運命論的、自己否定的傾向（純粹自然主義）と結合していたことは事実である。そうしてこれはしばしば後者の一つの属性のごとく取扱われてきたにかかわらず、近來（純粹自然主義が彼の觀かんしやう照論において実人生に対する態度を一決して以来）の傾向は、ようやく両者の間の溝渠こうきよのついに越ゆべからざるを示している。この意味において、魚住氏の指摘はよくその時を得たものというべきである。し

かし我々は、それとともにある重大なる誤謬ごびゆうが彼の論文に含まれているのを看過することができない。それは、論者がその指摘を一の議論として発表するために——「自己主張の思想としての自然主義」を説くために、我々に向つて一の虚偽きよぎを強要していることである。相矛盾せる両傾向の不思議なる五年間の共棲きようせいを我々に理解させるために、そこに論者が自分勝手に一つの動機ねつぞうを捏造ねつぞうしていることである。すなわち、その共棲がまったく両者共通の怨敵おんてきたるオオソリテイ——国家というものに対抗するために政略的に行われた結婚であるとしていることである。

それが明白なる誤謬、むしろ明白なる虚偽であることは、ここに詳しく述べるまでもない。我々日本の青年はいまだかつてかの

強権に対して何らの確執をも醸^{かも}したことがないのである。したがって国家が我々にとって怨敵となるべき機会もいまだかつてなかったのである。そうしてここに我々が論者の不注意に対して是正^{ぜせい}を試みるのは、けだし、今日の我々にとって一つの新しい悲しみでなければならぬ。なぜなれば、それはじつに、我々自身が現在においてもっている理解のなおきわめて不徹底の状態にあること、および我々の今日および今日までの境遇がかの強権を敵としうる境遇の不幸よりもさらにいつそう不幸なものであることをみずから承認するゆえんであるからである。

今日我々のうち誰でもまず心を鎮^{しず}めて、かの強権と我々自身との関係を考えてみるならば、かならずそこに予想外に大きい疎隔^{そかく}

（不和ではない）の横たわっていることを発見して驚くに違いない。じつにかの日本のすべての女子が、明治新社会の形成をまったく男子の手に委ねた結果として、過去四十年の間一に男子の奴隷として規定、訓練され（法規の上にも、教育の上にも、はたまた実際の家庭の上にも）、しかもそれに満足——すくなくともそれに抗弁する理由を知らずにいるごとく、我々青年もまた同じ理由によつて、すべて国家についての問題においては（それが今日の問題であろうと、我々自身の時代たる明日の問題であろうと）、まったく父兄の手に一任しているのである。これ我々自身の希望、もしくは便宜によるか、父兄の希望、便宜によるか、あるいはまた両者のともに意識せざる他の原因によるかはべつとして、とも

かくも以上の状態は事実である。国家ちよう問題が我々の脳裡^{のうり}に入ってくるのは、ただそれが我々の個人的利害に關係する時だけである。そうしてそれが過ぎてしまえば、ふたたび他人同志になるのである。

二

むろん思想上の事は、かならずしも特殊の接觸、特殊の機会によつてのみ發生するものではない。我々青年は誰しもそのある時期において徴兵検査のために非常な危惧^{きぐ}を感じている。またすべての青年の權利たる教育がその一部分——富有^{ふゆう}なる父兄をもつた

一部分だけの特権となり、さらにそれが無法なる試験制度のためにさらにまた約三分の一だけに限られている事実や、国民の最大多数の食事を制限している高率の租税（そぜい）の費途（ひと）なども目撃している。およそこれらのごく普通な現象も、我々をしてかの強権に対する自由（とうきゆう）討究を始めしむる動機たる性質はもっているに違いない。しかし、むしろ本来においては我々はすでにその自由討究を始めているべきはずなのである。にもかかわらず実際においては、幸か不幸か我々の理解はまだそこまで進んでいない。そうしてそこには日本人特有のある論理がつねに働いている。

しかも今日我々が父兄に対して注意せねばならぬ点がそこに存するのである。けだしその論理は我々の父兄の手にある間はその

国家を保護し、發達させる最重要の武器なるにかかわらず、一度我々青年の手に移されるに及んで、まったく何人も予期しなかつた結論に到達しているのである。「国家は強大でなければならぬ。我々はそれを阻害^{そがい}すべき何らの理由ももっていない。ただし我々だけはそれにお手伝いするのはごめんだ！」これじつに今日比較的教養あるほとんどすべての青年が国家と他人たる境遇においてもちうる愛国心の全体ではないか。そうしてこの結論は、特に実業界などに志す一部の青年の間には、さらにいつそう明晰^{めいせき}になっている。曰く^{いわ}、「国家は帝国主義でもって日に増し強大になっていく。誠にけっこうなことだ。だから我々もよろしくその真似をしなければならぬ。正義だの、人道だのということにはおかま

いなしに一生懸命もう儲けなければならぬ。国のためなんて考える暇があるものか！」

かの早くから我々の間にざんにゆう竄入している哲学的虚無主義のごときも、またこの愛国心の一步だけ進歩したものであることはいうまでもない。それは一見かの強権を敵としているようであるけれども、そうではない。むしろ当然敵とすべき者に服従した結果なのである。彼らはじつにいつさいの人間の活動を白眼をもつて見るごとく、強権の存在に対してもまたまったく没交渉なのである——それだけ絶望的なのである。

かくて魚住氏のいわゆる共通のおんてき怨敵が実際において存在しないことは明らかになった。むろんそれは、かの敵が敵たる性質を

もっていないということでない。我々がそれを敵にしていないということである。そうしてこの結合（矛盾せる両思想の）は、むしろそういう外部的原因からではなく、じつにこの両思想の対立が認められた最初から今日に至るまでの間、両者がともに敵をもたなかったということに原因しているのである。（後段参照）

魚住氏はさらに同じ誤謬ごびゅうから、自然主義者のある人々がかつてその主義と国家主義との間にある妥協を試みたのを見て、「不徹底」だと咎とがめている。私は今論者の心持だけは充分了解することができる。しかしすでに国家が今日まで我々の敵ではなかった以上、また自然主義という言葉の内容たる思想の中心がどこにあるか解らない状態にある以上、何を標準として我々はしかく軽々

しく不徹底呼ばわりをすることができよう。そうしてまたその不徹底が、たとい論者のいわゆる自己主張の思想からいつては不徹底であるにしても、自然主義としての不徹底ではかならずしもないのである。

すべてこれらの誤謬は、論者がすでに自然主義という名に含まるる相矛盾する傾向を指摘しておきながら、なおかつそれに対して厳密なる検^{けん}覈^{かく}を加えずにいるところから来ているのである。いつさいの近代的傾向を自然主義という名によって呼ぼうとする笑うべき「ローマ帝国」的^{もうそう}妄想から来ているのである。そうしてこの無定見は、じつは、今日自然主義という名を口にするほとんどすべての人の無定見なのである。

三

むろん自然主義の定義は、すくなくとも日本においては、まだきまつていない。したがって我々はおのおのその欲する時、欲するところに勝手にこの名を使用しても、どこからも咎め^{とが}られる心配はない。しかしそれにしても思慮ある人はそういうことはしないはずである。同じ町内に同じ名の人が五人も十人もあつた時、それによつて我々の感ずる不便はどれだけであるか。その不便からだけでも、我々は今我々の思想そのものを統一するとともに、またその名にも整理を加える必要があるのである。

見よ、花袋氏、藤村氏、天溪氏、抱月氏、泡鳴氏、白鳥氏、今は忘られているが風葉氏、青果氏、その他——すべてこれらの人は皆ひとしく自然主義者なのである。そうしてそのおのおの間には、今日すでにその肩書以外にはほとんどまったく共通した点が見いだしがたいのである。むろん同主義者だからといって、かならずしも同じことを書き、同じことを論じなければならぬという理由はない。それならば我々は、白鳥氏対藤村氏、泡鳴氏対抱月氏のごとく、人生に対する態度までがまったく相違している事実をいかに説明すればよいのであるか。もつともこれらの人の名はすでになかば歴史的に固定しているのであるからしかたがないとしても、我々はさらに、現実暴露ばくろ、無解決、平面描写、劃かく一いつ

線の態度等の言葉によつて表わされた科学的、運命論的、静止的、自己否定的の内容が、その後ようやく、第一義慾とか、人生批評とか、主観の権威とか、自然主義中の浪漫的分子とかいう言葉によつて表さるる活動的、自己主張的内容に變つてきたことや、荷風氏が自然主義者によつて推すい讃さんの辞を贈られたことや、今度また「自己主張の思想としての自然主義」という論文を読まされたことなどを、どういう手續をもつて承認すればいいのであるか。それらの矛盾は、ただに一見して矛盾に見えるばかりでなく、見れば見るほどどこまでも矛盾しているのである。かくて今や「自然主義」という言葉は、刻こく一いつ刻こくに身体も顔も變つてきて、まづたく一個のスフィンクスになつている。「自然主義とは何ぞや？

その中心はどこにありや？」かく我々が問を発する時、彼らのうち一人でも起つてそれに答えうる者があるか。否、彼らはいちように起つて答えるに違いない、まったくべつべつな答を。

さらにこの混雑は彼らの間のみに止まらないのである。今日の文壇には彼らのほかにべつに、自然主義者という名を肯じない人たちがあつた。しかしそれらの人たちと彼らとの間にはそもそもどれだけの相違があるのか。一例を挙げるならば、近き過去において自然主義者から攻撃を受けた享樂主義と觀照論当時の自然主義との間に、一方がやや贅沢で他方がややつましやかだといふ以外に、どれだけの間隔があるだろうか。新浪漫主義を唱える人と主觀的苦悶を説く自然主義者との心境にどれだけの扞格があ

るだろうか。淫売屋いんばいやから出てくる自然主義者の顔と女郎屋じよううやから出てくる芸術至上主義者の顔とその表れている醜悪しゆうあくの表情に何らかの高下があるだろうか。すこし例は違うが、小説「放浪」に描かれたる肉・靈・合・致・の・全・我・的・活・動・なるものは、その論理と表象の方法が新しくなったほかに、かつて本能満足主義という名の下に考量されたものとどれだけ違っているだろうか。

魚住氏はこの一見収攬しゆうらんしがたき混乱の状態に對して、きわめて都合のよい解釈を与えている。曰くいわ、「この奇なる結合（自己主張の思想とデターミニスチックの思想の）名が自然主義である」と。けだしこれこの状態に對する最も都合のよい、かつ最も氣の利きいた解釈である。しかし我々は覺悟しなければならぬ。こ

の解釈を承認する上は、さらにある驚くべき大罪を犯さねばならぬということ。なぜなれば、人間の思想は、それが人間自体に關するものなるかぎり、かならず何らかの意味において自己主張的、自己否定的の二者を出ずることができないのである。すなわち、もし我々が今論者の言を承認すれば、今後永久にいつさいの人間の思想に対して、「自然主義」という冠詞かんしをつけて呼ばねばならなくなるのである。

この論者の誤謬ごびゅうは、自然主義発生當時に立歸つて考えれば、いっそう明瞭である。自然主義と称とえらるる自己否定的の傾向は、誰も知るごとく日露戦争以後において初めて徐々に起つてきたものであるにかかわらず、一方はそれよりもずっと以前——十年以

前からあつたのである。新しき名は新しく起つた者に与えらるべきであろうか、はたまたそれと前からあつた者との結合に与えらるべきであろうか。そうしてこの結合は、前にもいったごとく、両者とも敵をもたなかった（一方は敵をもつべき性質のものでなく、一方は敵をもつていなかった）ことに起因きいんしていたのである。べつの見方をすれば、両者の経済的状态の一時的共通（一方は理想をもつべき性質のものではなく、一方は理想を失つていた）に起因しているのである。そうしてさらに詳しくくわいえば、純粹自然主義はじつに反省の形において他の一方から分化したものであつたのである。

かくてこの結合の結果は我々の今日まで見てきたごとくである。

初めは両者とも仲よく暮していた。それが、純粹自然主義にあつてはたんに見、そして承認するだけの事を、その同棲者どうせいしゃが無遠慮にも、行い、かつ主張せんとするようになって、そこにこの不思議なる夫婦は最初の、そして最終の夫婦喧嘩を始めたのである。実行と觀照との問題がそれである。そうしてその論争によつて、純粹自然主義がその最初から限定されている劃一線の態度を正確に決定し、その理論上の最後を告げて、ここにこの結合はまったく内部において断絶してしまっているのである。

四

かくて今や我々には、自己主張の強烈な欲求が残っているのみである。自然主義発生当時と同じく、今なお理想を失い、方向を失い、出口を失った状態において、長い間鬱積^{うつせき}してきたその自身^{もてあま}の力を独りで持余しているのである。すでに断絶している純粹自然主義との結合を今なお意識しかねていることや、その他すべて今日の我々青年がもっている内訌^{ないこう}的、自滅的傾向は、この理想喪失^{そうしつ}の悲しむべき状態をきわめて明瞭に語っている。——
 そうしてこれはじつに「時代閉塞^{じだいへいそく}」の結果なのである。

見よ、我々は今どこに我々の進むべき路を見いださうるか。ここに一人の青年があつて教育家たらむとしているとする。彼は教育とは、時代がそのいっさいの所有を提供して次の時代のために

する犠牲だということを知っている。しかも今日においては教育はただその「今日」に必要な人物を養成するゆえんにすぎない。そうして彼が教育家としてなしうる仕事は、リーダーの一から五までを一生繰返すか、あるいはその他の学科のどれもごく初歩のところを毎日毎日死ぬまで講義するだけの事である。もしそれ以外の事をなさむとすれば、彼はもう教育界にすることができないのである。また一人の青年があつて何らか重要な発明をなさむとしているとする。しかも今日においては、いっさいの発明はじつにいっさいの労力とともにまったく無価値である——資本という不思議な勢力の援助を得ないかぎりは。

時代閉塞の現状はただにそれら個々の問題に止まらないのであ

る。今日我々の父兄は、だいたいにおいて一般学生の氣風が着実になったといつて喜んでゐる。しかもその着実とはたんに今日の学生のすべてがその在学時代からほうしよくぐち奉職口の心配をしなければならなくなったということではないか。そうしてそう着実になっているにかかわらず、毎年何百という官私大学卒業生が、その半分は職を得かねて下宿屋にごろごろしてゐるではないか。しかも彼らはまだまだ幸福なほうである。前にもいったごとく、彼らに何十倍、何百倍する多数の青年は、その教育を享うける権利を中途半端で奪われてしまふではないか。中途半端の教育はその人の一生を中途半端にする。彼らはじつにその生涯の勤勉努力をもつてしてもなおかつ三十円以上の月給を取ることが許されないのである。

むろん彼らはそれに満足するはずがない。かくて日本には今「遊民」という不思議な階級ぜんじが漸次その数を増しつつある。今やどんな僻村へきそんへ行つても三人か五人の中学卒業者がいる。そうして彼らの事業は、じつに、父兄の財産を食い減すこととむだ話をする
ことだけである。

我々青年を囲繞いぎようする空気は、今やもうすこしも流動しなくなつた。強権の勢力は普く国内あまねに行わたつてゐる。現代社会組織はその隅々すみずみまで発達している。——そうしてその発達がもはや完成に近い程度まで進んでいることは、その制度の有する欠陥けっかんの日一日明白になっていることによつて知ることができる。戦争とか豊作とか饑饉ききんとか、すべてある偶然の出来事の発生するでなけ

れば振興する見込のない一般經濟界の状態は何を語るか。財産とともに道德心をも失つた貧民と売淫婦ばいいんふとの急激なる増加は何を語るか。はたまた今日我邦わがくににおいて、その法律の規定している罪人の数が驚くべき勢いをもつて増してきた結果、ついにみすみすその国法の適用を一部において中止せねばならなくなっている事実（微罪不檢挙の事実、東京並びに各都市における無数の売淫婦が拘禁こうきんする場所がないために半公認の状態にある事実）は何を語るか。

かくのごとき時代閉塞の現状において、我々のうち最も急進的な人たちが、いかなる方面にその「自己」を主張しているかはすでに読者の知るごとくである。じつに彼らは、抑えても抑えても

抑えきれぬ自己その者の圧迫に堪えかねて、彼らの入れられている箱の最も板の薄い処、もしくは空隙（現代社会組織の欠陥）に向つてまったく盲目的に突進している。今日の小説や詩や歌のほとんどすべてが女郎買、淫売買、ないし野合、姦通の記録であるのはけつして偶然ではない。しかも我々の父兄にはこれを攻撃する権利はないのである。なぜなれば、すべてこれらは国法によつて公認、もしくはなかば公認されているところではないか。

そうしてまた我々の一部は、「未来」を奪われたる現状に対して、不思議なる方法によつてその敬意と服従とを表している。元禄時代に対する回顧がそれである。見よ、彼らの亡国的感情が、その祖先が一度遭遇した時代閉塞の状態に対する同感と思慕と

によつて、いかに遺憾なくその美しさを發揮しているかを。

かくて今や我々青年は、この自滅の状態から脱出するために、ついにその「敵」の存在を意識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望やないしその他の理由によるのではない、じつに必至である。我々はいっせいに起つてまずこの時代閉塞^{へいそく}の現状に宣戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元祿の回顧とを罷^やめて全精神を明日の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾^{けい}注^{ちゆう}しなければならぬのである。

明日の考察！　これじつに我々が今日においてなすべき唯一である、そうしてまたすべてである。

その考察が、いかなる方面にいかにして始めらるべきであるか。それはむろん人々各自の自由である。しかしこの際において、我々青年が過去においていかにその「自己」を主張し、いかにそれを失敗してきたかを考えてみれば、だいたいにおいて我々の今後の方向が予測されぬでもない。

けだし、我々明治の青年が、まったくその父兄の手によって造りだされた明治新社会の完成のために有用な人物となるべく教育されてきた間に、べつに青年自体の権利を認識し、自発的に自己

を主張し始めたのは、誰も知るごとく、日清戦争の結果によつて国民全体がその国民的自覚の勃興ぼつこうを示してから間もなくの事であつた。すでに自然主義運動の先蹤せんしようとして一部の間に認められているごとく、ちよぎゅう 樗牛の個人主義がすなわちその第一声であつた。（そうしてその際においても、我々はまだかの既成強権に對して第二者たる意識を持ちえなかつた。樗牛は後年彼の友人が自然主義と国家的觀念との間に妥協を試みたごとく、その日蓮論の中に彼の主義對既成強権の压制結婚を企てている）

樗牛の個人主義の破滅の原因は、かの思想それ自身の中にあつたことはいふまでもない。すなわち彼には、人間の偉大に関する伝習的迷信がきわめて多量に含まれていたとともに、いっさいの

「既成」と青年との間の關係に對する理解がはるかに局限的（日露戦争以前における日本人の精神的活動があらゆる方面において局限的であつたごとく）であつた。そうしてその思想が魔語のごとく（彼がニイチエを評した言葉を借りていえば）当時の青年を動かしたにもかかわらず、彼が未来の一設計者たるニイチエから分れて、その迷信の偶像を日蓮という過去の人間に発見した時、「未来の権利」たる青年の心は、彼の永眠を待つまでもなく、早くすでに彼を離れ始めたのである。

この失敗は何を我々に語っているか。いつさいの「既成」をそのままにしておいて、その中に自力をもつて我々が我々の天地を新に建設するといふことはまったく不可能だといふことである。
あらた

かくて我々は期せずして第二の経験——宗教的欲求の時代に移った。それはその当時においては前者の反動として認められた。個人意識の勃興がおのずからその跳ちやうりよう梁せいくに堪えられなくなつただと批評された。しかしそれは正鵠を得ていない。なぜなればそこにはただ方法と目的の場所との差違があるのみである。自力によつて既成の中に自己を主張せんとしたのが、他力によつて既成のほかと同じことをなさんとしたまでである。そうしてこの第二の経験もみごとに失敗した。我々は彼の純粹にてかつ美しき感情をもつて語られた梁川の異常なる宗教的実験の報告を読んで、その遠神清浄なる心境に対してかぎりなき希ききゆうどうけい求憧憬の情を走らせながらも、またつねに、彼が一個の肺病患者であるという事

実を忘れなかつた。いつからとなく我々の心にまぎれこんでいた「科学」の石の重みは、ついに我々をして九きゆうこう 阜ふの天に飛翔ひしようすることを許さなかつたのである。

第三の経験はいうまでもなく純粹自然主義との結合時代である。この時代には、前の時代において我々の敵であつた科学はかえつて我々の味方であつた。そうしてこの経験は、前の二つの経験にも増して重大なる教訓を我々に与えている。それはほかではない。「いっさいの美しき理想は皆虚偽きよぎである！」

かくて我々の今後の方針は、以上三次の経験によつてほぼ限定されているのである。すなわち我々の理想はもはや「善」や「美」に対する空想であるわけではない。いっさいの空想を峻しゅんきよ拒きよして、

そこに残るただ一つの眞実——「必要」！これじつに我々が未来に向つて求むべきいっさいである。我々は今最も嚴密に、大胆に、自由に「今日」を研究して、そこに我々自身にとつての「明日」の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確實なる理想である。

さらに、すでに我々が我々の理想を発見した時において、それをいかにしていかなるところに求むべきか。「既成」の内にか。外にか。「既成」をそのままにしてか、しないか。あるいはまた自力によつてか、他力によつてか、それはもういうまでもない。今日の我々は過去の我々ではないのである。したがって過去における失敗をふたたびするはずはないのである。

文学——かの自然主義運動の前半、彼らの「真実」の発見と承認とが、「批評」として刺戟をもっていた時代が過ぎて以来、ようやくただの記述、ただの説話に傾いてきている文学も、かくてまたその眠れる精神が目^{さま}を覚^さめてくるのではあるまいか。なぜなれば、我々全青年の心が「明日」を占領した時、その時「今日」のいつさいが初めて最も適切なる批評を享^うくるからである。時代に没^{ぼつ}頭^{とう}しては時代を批評することができない。私の文学に求むるところは批評である。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集 12 国木田独歩 石川啄木集」集英社

1967（昭和42）年9月7日初版発行

1972（昭和47）年9月10日9版発行

入力：j.utiya

校正：浜野智

1998年8月1日公開

2005年11月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

時代閉塞の現状

(強権、純粹自然主義の最後および明日の考察)

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 石川啄木

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>